東日本旅客鉄道労働組合
東京都渋谷区代々木２丁目２番６号
ＪＲ新宿ビル13Ｆ　〒151-8512
Tel. 03－3375-5740（代）
発行責任者　大 熊 勝 明

JR東労組 本部ＯＢ会 ニュース

№ 162　2011 年 10 月　発行

仙台に久しぶりの笑顔と歓喜の声が

被災体験を聞き、被災地を見学

全地本ＯＢ会の代表と被災者が熱い交流

澄み切った秋晴れの9月8日、宮城県仙台市・秋保温泉に集まった全12地本のＯＢ会員は満面の笑顔で声を交わし、歓喜に包まれました。この日、仙台地本管内で「東日本大震災」によって自宅を流出したＯＢの3家族と、同じく気仙沼市で被災したＯＢの1家族が集まって、全12地本の代表によって編成された「現地調査団」との交流が、仙台市・秋保温泉の「緑水亭」で開催されました。

大震災以降、避難所や親戚宅等へ身を寄せての生活を余儀なくされてきたＯＢの被災者の皆さんでしたが、この日ばかりは日頃の気苦労も忘れてゆっくりと温泉につかり、ＯＢ会員の余興を楽しみながら食事をし、楽しい一夜を過ごされました。この夜、会場となった秋保温泉「緑水亭」は、明るい笑顔と楽しい笑い声に包まれました。

一路仙台をめざし

9月8日、参加者の集合場所となった東京駅八重洲南改札口には、東北3地本を除く9地本の代表32名が「今か今か」と満を持した顔で集まりました。

この日の「被災地調査と被災家族の激励行動」は、震災発生直後に取り組んだ「義援金活動」と併せて、長時間熟慮のうえ計画された「被災者支援活動」として実施したものです。

地震当初は「ＯＢにもできる軽度の労働」を考えました。しかし今度の大震災の前には、「若い人による重労働」か「重機による作業」以外なく、ＯＢには「義援金による支援」しかないのかと一時期あきらめかけました。けれども「被災者の話を聞き、現地を見て、それを多くの人に伝え、支援の輪を広げる」のも立派なボランティア活動だと考え直し、多くの人の協力を得て、この日に実現されたのです。

ＪＲバス関東の貸切バスに乗った一行は、首都高速から東北自動車道へと入り、一路仙台市の奥座敷・秋保温泉をめざしました。途中の車内では盛岡地本の若い組合員が作った「被災状況と組合員のボランティア活動」のビデオを見たり、『上を向いて歩こう』を歌いながら士気を高め合いました。

被災家族との交流・激励会で楽しい一夜を過ごした現地調査団の一行

交流会では涙が、演芸には笑いが

15時に秋保温泉の『緑水亭』で東北3地本のＯＢ会代表及び被災者4家族と落ち合った「調査団」は、15時30分からの「被災家族との激励交流会」に臨みました。

「激励・交流会」では、今回の大津波で自宅を流失された仙台地本ＯＢ会の小野剛央さん、佐藤初男さん、冨田英夫さんと、盛岡地本の内海勝行さんの4名がそれぞれ奥様を連れ添って参加され、皆さんから被災当日のお話がありました。その奥様のお話の中でお孫さんの話に触れられた時、胸が詰まり目に涙した時には、参加者の心は強く打たれました。とにかく大地震の時は、必ず津波が来るものと思い、必死になって高台へ逃げることが大切だと誰もが力説され、津波に追われ大変な思いをしながら生き延びた体験談には、大きな教訓となる話がいっぱいでした。

18時からの夕食会は、楽しい時間となりました。被災された皆さんも6ヶ月に亘る長期の避難生活の苦労を忘れ、久しぶりに温泉にゆっくりつかり、浴衣姿でくつろぎながら民謡や踊り・手品等のＯＢ会員の演芸を楽しみました。久しぶりに宴会場が大笑いの渦になりました。

野蒜駅を見て、石巻で献花

2日目は、8時30分にホテル前で被災家族の皆さんとお別れし、仙台地本の今野副委員長と地本ＯＢ会の平井副会長の案内で、被災地の状況を調査しました。

先ず昨年10月の東北3地本ＯＢ会で訪れた松島海岸を通って、ＪＲ東労組組合員がボランティアで活躍した東松島の市内を見ながら野蒜駅へ行きました。

野蒜駅で一旦バスを下車し、駅前に住宅はなく誰一人歩いている住民のいない町中にポツンと残っている駅舎とホーム周辺を見て回りました。グチャグチャに破壊された駅舎と真赤にさびたレールを目詰めるＯＢの後ろ姿には哀愁が漂っていました。

津波に襲われ、復旧の目途も立たない野蒜駅

その後、一行を乗せたバスは、宮城県内で最も大きな被害を被った石巻市を一望できる高台の日和山公園を訪れました。その公園では、海に向かって献花し、黙祷を捧げて亡くなった人々のご冥福を祈りました。

高台の公園から見える市内は、すでに瓦礫が片付けられて更地に整理されており、とてもテレビで放映されたような惨状が繰り広げられたとは思えない状況でした。ただ遠くに山高く積まれた瓦礫の山だけが当時を偲んでいました。

これからも応援しよう

今回の「被災地調査と被災家族の激励」という取り組みは、東北3地本を除く9地本のＯＢにとっては「東京からのバス移動」という大変厳しい条件でありながら、事故一つなく大成功したと思います。最高齢80歳のＯＢ会員を始め、参加した全員のＯＢが「被災者の苦労を思えば何の事はない」と周囲の心配を吹き飛ばし、逆に元気な被災者から「元気と明るさ」をもらいました。

〝ＪＲ東労組のＯＢで本当に良かった〟

〝困った時こそ友達だ〟と心からそう思えた2日間でした。

総会の議論を踏まえ、被災者の支援とOB会の絆を強めよう！

報告／ＪＲ総連ＯＢ連絡会第８回定期総会

代議員の活発な発言で大成功

ＪＲ総連ＯＢ連絡会は、9月14日～15日、第8回定期総会を目黒さつき会館・大会議室において開催しました。

司会者は総会冒頭、震災で亡くなられた方々と、ＪＲ総連元特別顧問の松崎　明氏、ＪＲ総連元委員長の柴田光晴氏、ＪＲ総連ＯＢ連絡会元幹事の奥島　彰氏のご冥福を祈念して黙祷を捧げました。

ＯＢ連絡会・大熊会長から、「義援金」に全国のＯＢ会員が協力して頂いたことのお礼と、東電の福島第一原発の事故により、避難生活を余儀なくされているＯＢ会員の思いに立ち、ＯＢ連絡会として引き続き支援を続けて行く旨の挨拶が行なわれました。

総会には多くの来賓が参加され、退職者連合の木村事務局次長、ＪＲ総連・武井委員長、田城参議院議員、さらに9条連、鉄道ファミリー、自然と人間社、美世志会と、夫々の代表からＯＢ連絡会に激励・連帯の挨拶を頂きました。

特に田城議員からは、震災発生直後に逼迫したガソリンを始めとした緊急支援物資の輸送をいち早く関係個所に働き掛け、被災地を迂回した輸送体制が出来たことが、その後の国会活動に繋がっていると語られました。

また、武井委員長からは「未来の子供たちの為に原発問題に立ち向かおう」「弾圧に抗し、社会正義を貫こう」と呼びかけられました。

ＪＲ総連の運動をＯＢ会も支えよう！

その後、伊藤事務長から田城 郁参議院議員当選が、その後の活気ある運動に繋がったこと、「義援金」がＯＢ連絡会集約で750万円に達したことなどが報告され、「大震災」の被災者支援と反弾圧、脱原発の取り組みをＯＢ会員が積極的に担おうと方針が提起されました。

ＪＲ総連ＯＢ連絡会規則の一部改正として、総会に参加する単組の代議員数の変更と、会長以下三役の選出について「定期総会で会員の中から選ぶ」という改正案が提起されました。

制限するほど多数の代議員が挙手

総会は10名の代議員から発言があり、主な発言は次の通り。

3・11大震災に関しては、①自然の猛威は人間の傲慢さへの警鐘ではないか。②地震の被害は少なく、津波による被害が拡大した。③ＯＢ会員の安否確認が現職の若い組合員の力でなされた。④ＪＲ西労に加入した組合員に、会社の脱退工作が仕掛けられたが、本人は支援してもらった東北（盛岡）のボランテアに自主参加した。

原発事故に関しては、①原発は直ちに中止・廃止すべきだ、②電力会社と安全保安院は、事故の責任をとれ、③核と人間は共存出来ない、④「核」は軍事力増強に転じる危険性を孕んでいる、⑤福島原発事故は地震で配管が破断したことから始まっている。⑥放射能からは逃げられない、安心して生きられる福島にしよう。⑦土壌汚染は日本全国に広がる、⑧脱原発の闘いは「今」の機を逃してはならない。⑨東海の葛西は、「原発にはリスクが伴う」と発言したが、許されない。

その他の意見として、①九州で労働運動を守る闘いは前進している。②田城後援会の活動は今後益々大切になる、等々の発言がありました。

いまＯＢ会に求められているものは

第8回定期総会は、四時間という短い開催時間でしたが、多くの意見が出ました。改めて各単組の活動が着実に前進していることが確認できました。

菅から野田首相へと総理大臣が交代しました。「東日本大震災」の復興に立向かう指導体制の遅れが目立っています。被災者は生きて行かねばならず、一日でも早い復興への道筋が求められています。その為に、ＯＢ会員は健康に留意し、全国各地から「声」を発し、組合員と共に学び合い、連携して闘いましょう。

第8回定期総会は、役員側から提起された運動方針と会則の一部改正が全て承認され、成功裏に終了しました。

なお、役員は全員の留任となりました。

〔二〇一一年度役員〕

会　長	大熊勝明（ＪＲ東労組）
副会長	川端　実（ＪＲ貨物労組）
副会長	鈴木重之（ＪＲ東海労）
事務長	伊藤義男（ＪＲ東労組）
幹　事	佐藤有二（ＪＲ北海道労組）
幹　事	文中　恵（ＪＲ西労）
幹　事	中村靖治（ＪＲ貨物労組）

私のエルダー職場紹介します

エルダーになって、今思うこと

東京地本・品川支部 OB　平塚　清

エルダー制度の一期生として新宿ルミネに出向して早や3年目となり、来年度中に期間が終了する。労働組合がなく、労働者としては「上司の命令に服従」を旨とするような屈辱的な環境の中で、警備員として働いてきました。私の職場は、仕事の増減がかなり発生し、時として労働条件も変化する、そんな毎日を繰り返しています。

私は、趣味のボーリングを長年楽しんできた経験があり、職場レクとしてボーリングを一緒に楽しむ仲間づくりをして、現在頑張っています。契約期間終了まで、残りが1年数ヶ月ですが、労働者としての仲間の大切さや、いざという時には団結して対峙することの必要性を訴え、本当の仲間づくりをやり遂げたいと思います。

先日、出身分会で定期大会があり、傍聴者として参加してきました。その時、聞き捨てならない話を耳にしました。それは一人の指導員が区長の「一発転勤命令」で、この一〇月に職場を出されるという事象が発生したとのことでした。

この指導員は、国鉄改革で広域移動により北海道から東京に来られた組合員で、慣れない環境の中で苦労して職場に打ち解け仕事をおぼえ指導員に推挙された人です。当然、仲間や後輩からも信頼が厚く、本人も転勤命令には「絶対反対」と闘う決意を固めています。

大会では、二三名の組合員から発言があり、この問題に七割（16人）の人が触れました。線区の特性を熟知し、ここの運転士の気心を踏まえて的確な指導のできる指導員を、いとも簡単に一方的に転勤させようとするのは「おかしい」「許せない」との意見が集中しました。当然のこととして、理不尽な会社に対して「ストライキも辞さず闘うべし」とスト権論議の必要性を説く声も出されました。

若い人達の闘う姿勢が示され、大会は成功裏に終了しましたが、私の感想としては、闘いはこれからだと思います。なぜなら「会社は理不尽だ」との認識は共有しているものの、自分たち自身は「如何に闘うのか」という方向性と具体論が少なかったと思います。やはり人間は強く感じたら動かなければ何の意味もないと思います。

懇親会の場で若い人に「職場で早急に仲間と議論し合ってほしい」と進言し、もしその時に「問題はない」と発言するような組合員がいたら、とことん議論をして会社の理不尽を認める様な人に対しては「仲間じゃないネ」と言える位の自分の強い意志を持ってほしいと話しました。

やはり己を強化するためには、厳しいことが言えなければダメだと思うし、言った以上は自分にも責任を持って行動しなければならないと思います。今後も後輩との関わりをしっかり持ち続けたいと思います。